

とく
徳

ほう
朋

しょうろうびょうし
生老病死の苦からの解放

延塚 知道



のぶつか ともみち
1948—現在
福岡県生まれ。大谷大学
名誉教授

人間の考え方で、老人の苦を超えようとするとうとうしたらよいか。老人にならないように、努力するしかないでしょう。一生懸命運動して、健康に気を付けて、元気になろうと。そのおかげで皆さんも平均寿命が延びて若くなっていったわけです。だから、私たちが老人特有の苦を超えようとするとき、人間が考える事が出来ることは、何とかして老人にならないようにするしか仕方ありません。さらに病気にならないように健康に気を付けることです。(中略) 人間の死亡率は100%です。だからいくら死なないように頑張っても結局は死んでしまいます。だから病気にならないように、死なないようにという考え方では、死という制約を超えることはできません。生老病死という制約から自由になることはできないわけです。そうですね、このような考え方を外道と言います。つまり、自分の都合に合わせて、老人がいやだから、病気がいやだから、死ぬのがいやだから、そうならないようにしようという考え方です。人間はみんな自分の都合に合わせて考える。そういう考え方を外道と言います。だから外道というのは悪い考え方ではありません。人間の普通の考え方です。ところがそういう外道という考え方では、老人になる制約、病気になる制約、死んでいく制約から自由になることはできない。生老病死を超えるというわけにはいかないのです。だからお釈迦さまは人間の都合に合わせていうときの「人間の都合」とは一体何なのかと問うのです。人間の都合のほうに焦点を当てて問うた

のです。老人になって、病気になって、死んでいくのを苦と覚めるのは人間だけでしょう。(中略)

人間の問題の最も深い根源は、人間の自己執着じ こしゅうちやくと一つになっている都合です。生まれてから無意識に作られていった人間の都合が、本当に正しいのかどうか。そこに焦点しょうてんを当ててみましょうというのが、お釈迦さまの仏教の考え方です。自分の都合に合わせて外側を変えると、いう考え方があって当然ですが、その都合が本当に正しいかどうかを尋ねるといふ考え方も、またあって当然ではないでしょうか。生きていく主体に合わせて外側を変えるのではなく、主体そのものを問うといふ考え方です。

それを内観道ないかんだう、あるいは仏教といふわけでは、(中略)人間の無意識の都合を問うて、生老病死しょうろうびやうしの苦しみがどこから出ているか、それに目覚めて生老病死の苦しみに自由になろうではないか。こういう方法なのです。すばらしいじゃないですか。お金はかからんし、地位や名誉は何もありません。病気でもその原因を突き止めないと薬の処方じやうほうのしようがありません。それと同じように、人間の苦の原因に目覚めて、その苦から自由になろうといふのです。



(『今、いのちがあなたを覚めている』)

自分の外側ばかりを見て苦しんでいるのが私たちですが、お釈迦さまの教えによって自分の内側を見つめていく事が、苦しみを超える道だと思ひます。(哲弘 拝)



この「徳朋」は仏教を拠り所よとして居る方々の言葉に直じかに触れ、この身で覚める事を願ひとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思ひますが、気にせず読んでみて下さい